
太陽は眠っている

彩夜仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽は眠っている

【Nコード】

N4686E

【作者名】

彩夜仁

【あらすじ】

児童労働者として働く少年リオはある日、仲間らと共に放浪の旅に出ることを思いつく。しかしそれと同時期に彼らの住む町は謎の軍隊に襲われてしまう。成り行きで出会った謎の少女「リン」を連れてリオとその仲間たちは町の外へと脱出するが・・・

はじめ「きっかけだったこと」(前書き)

「太陽は眠っている」という同名の楽曲をイメージして書いた小説です。興味のある方は検索にて・・・

はじめ「きっかけだったこと」

「太陽は眠っている」

はじめ「きっかけだったこと」

彼女の裸の足をじりりと鳴らしたのは歪にささくれ立った石片だった。

ここはくすぶった煙に包まれた街への入り口。

そこで彼女は独り佇んでいた。

時折低い唸り声に似た風の音と共に、何処からか重苦しい機械音が聞こえてくる。

周りに人影は無く、見上げれば町並みを囲う塔と見紛う程の高い煙突が黙々と煤煙を吐き出している。

彼女の前には街の外と中を隔てる入門ゲートが寂れて建っていた。

行く道を遮るように唐突に立ちはだかっているそれは最早過去の産物とも取れる程に劣化していた。

本来は白木で出来ていた筈のゲートだが、今は空から降り注ぐ煤煙により濃い灰色にその色を変えてしまっていた。

緩急付けた風に倣って変色した門はぎいぎいと音をたてる。

彼女はこの景色を見るのは初めてだ。

というよりも彼女には何故自分がこの場所にいるかも理解出来なかった。

見知らぬ土地だからこそ、無論自らの知識の域も及ぶべくも無い。

そうして彼女に示されたモノは目の前にあるゲートだけ。

あとの情報は何も与えられていない。

彼女は思った。

開くべきか？

開かないべきか？

選択肢はこの二つ。

裸の形の良い足を彼女は少し前へと踏み出した。

項垂れていた顔を僅かに上げると、視界を覆い隠す髪越しにそのゲートを見据える。

だらし無く垂らしていた拳に幾分か力がこもり、彼女の異国の衣装に皺が出来た。

そして一歩。

また一歩と歩んでいく彼女。

その度に彼女の足元からは小石を噛む嫌な音がする。

ゲートの目前までできた時には彼女の足は傷だらけになっており、指には血さえ滲んでいた。

彼女はそんな事等気にせぬかのように門の取っ手に手を絡ませる。

力はこめなかった。

何故ならその門は極々小さな力で開くことが出来たからである。

それはまるで門が彼女をひとりでに招き入れたかのようにもあった。

彼女は門をくぐる。

目に広がったのはやはり見た事も無い風景であった。

彼女の立っている幅の広い道に接する形で両側に西洋建築の建物が並んでいる。

看板が軒先に揺れてるあたり、何かの商店かその類だと予測できるが、今の彼女にはそんなことを考える余裕があるはずも無く、

只期待を裏切れた事に少なからずの衝撃を受けているだけである。

門を開き、新たな道へと進めば何某かの自分の知っている風景に出くわすのではないかと彼女は淡い期待を抱いていた。

何しろ彼女はここに来た理由も、意味も、きっかけさえも掴めていないのだから。

・・何も分からないのである。

彼女はあまりにも現実離れした事象の遭遇にひたすら立ち尽くしていた。

・彼女がこの世界で身に余る程の驚嘆すべき体験をするまであと少し。

ひとつめ「とても些細なやつ」

ひとつめ「とても些細なこと」

児童労働者のリベリオⅡグランズイルが見上げた空。

それはいつものように煤煙によって汚された灰色。

白煙に燻る投棄場を疲れた足取りで歩く彼が手に握るのは馴染み過ぎたペンチ。

その場所で目ぼしい物を仕事場に持って行っては修復するといういつもの労働。

誰の耳にも届くことも無く風に紛れて消えていった彼が労働の際に何気無く口にした独り言。

「・・・こいつは動きそうだな」

有り触れていた。

彼にとってそれは他愛の無い日常の1コマであり、さして気にも留めずにいればいずれは消えゆく瞬時的な記憶の中へ放り込まれるもの。

当然のことと思っていた。

今までは。

しかし彼の中にはいつからかそれに対する疑問が浮かんできていた。

どうして自分はここにいるんだろう？

いや、どうして自分はここにいないなければならない？

ここでもなくとも良いのではないか？

ここよりももっと刺激のある場所へ。

ここよりももっと面白い場所へ。

こんな場所で自分は一生を終わりにしたくない。

そしてそれは『野心』ともいうべき考えへと彼の中で変貌していくにはそれ程の時間はかからなかった。

にわかな決心を胸に抱きつつも、彼は仕事場へと戻っていった。

「よう、リオ。今日はいいいブツを仕入れてきたか？」

腐った木とトタン屋根のいかにも見窄らしい仕事場に戻ってきた彼は主人からリオと呼ばれた。

「このボイラーが使えるそうだ」

煤と錆で原型を止めない程に変色してしまっているボイラーを持ち上げてリオは言う。

「本当に動くのか？」

「僕の腕を知らない訳じゃないだろ？」

リオは慣れた手付きでペンチを掌で遊ばせている……。

かりかりと鉛筆が紙面の上を踊っていた。

紙の上には難解な設計図らしきものが今まさに完成してきているところであつた。

しかしそんな高尚な知的労働に携わっているのは、まだあどけなさの残る少女であつた。

鉛筆の握られたその手はともすれば編物やお裁縫をしていた方が似合いそうな程可愛らしい。

「よし、完成」

少女は一つ息を吐くと鉛筆を掌上で一回転させる。

中指を鼻の上に持っていていき、金縁眼鏡のズレを直す。

癖になっているその動作をしながら紙面の端に彼女がサインした文字は、Rezar mia ll Caspear（レザミア ll カスパール）。

それが彼女の名前だった。

「通算百十七作目の蒸気機械」

彼女は満足そうな顔をしながらその紙面を掲げて見ると誇ったようにそう言った。

するとそこに突如響くドアの開く音と野太い声。

「いよう！レザ。もう仕事か？俺は今起きた所だぞ」

彼女にはその声を聞いただけでもう既に声の主が誰だか想像がついたようだった。

溜息をつきながらレザと呼ばれた彼女は机に出来たばかりの設計図を置く。

そして声のした方を見もせずにしれっとした調子で答えた。

「貴方・・・今何時だと思ってるの？相変わらずネボスケね」

「すまんなあ、レザ。オレはたっくさん寝ないとたっくさん働けないんでなあ」

「別に謝ってもらわなくても良いけど」

どっしりとした足取りでレザの前に現れたのはがっちりとした体形の男だった。

「オマエもこれから仕事か！しっかり励めよ！」

男はレザの肩をばんばんと叩いて大袈裟に言う。

「痛いってば・・・今終わった所よ。一仕事終えて感慨にふけってる所に貴方が来てその雰囲気をぶち壊したの」

「がっはっはっはっそれはスマンかったなあ！お詫びにオレの行き着けのバーでぶっ飛びモンのをちよろまかしてやるからよう。堪忍な？」

腹に堪える大音声で男は文字通り豪快に笑った。

「ちよっとブル、私がお酒駄目なの知ってるでしょう？」

「心配ご無用！オマエにも酒の味がわかるようにオレがきっちり仕込んでヤルよ！」

ブルと呼ばれた男はお構いなしにレザの腕を掴み、ずんずんと歩いていった・・・

レザとブル、二人は並んで町並みを歩いていた。余りにも身長差があるせいか、二人が同じ年齢・十五歳であるとはきつと行き交う人々は夢にも思わないだろう。

鈍色の空と煤煙によって排出された黒雲が二人の頭上を彩っている。

「ねえ、いい加減に手を離してよ」

強い力で掴まれた手は彼女の力では如何する事も出来なかった。

「わっはっはっ・・もうすぐだからな」

言いながらブルは路地の角にある酒場へとレザを連れて入っていく。扉を勢い良く開くと先に彼女を通し、ブルはその後に続く。

「変な所で紳士なのね」

レザはウインクしながらブルに冷ややかな言葉を投げ掛ける。

「おゝいっ！へカあ！珍しいお客サンを連れて来てヤツたぞ！」

ブルは酒場の外にまで聞こえるくらいの大声で誰かを呼んだ。

傍らにいたレザは耳を塞いでいる。

暫くしてカウンターの向こうからは一人の少年が顔を出した。

「おうわ！こりゃまた珍しい気な組み合わせだなおい」

銀色の髪 of 少年はおどけた調子でずっこける仕草をする。

「マアな！今朝一番でレザに貸しを作っちまったからそれを返しに来たってワケだ！」

ブルは親指立て、白い歯を見せてにかっと笑った。

「・・無理矢理連れて来られたんだけど」

もうどうでもいいわというような感じで髪をかきあげながら言うレザ。

「まあそう言うなや！へカ、オマエのオススメをレザにヤツてくれ！」

へカと呼ばれた少年はふざけたように敬礼し、一言言った。

「あいあいさー」

レザとブルは並んでカウンターに座っていた。

程なくして、レザの前のグラスには真っ赤な液体がつげられる。

「ほれ、昨夜の残り物ん中で一番上等な奴だ。飲みやすいぜ」

レザはグラスを手にとると中で揺れている液体に目を凝らした。

「おいおい大丈夫だって。別に毒が入っているワケじゃないんだから」

「・・・じゃあ少しだけ」

レザは恐る恐るグラスに口をつけた。

すると・・・

あっという間に彼女はグラスにつがれていた赤ワインを飲み干してしまった。

「・・・たまげたなこりゃ」

二人が驚いて顔を見合わせるのを後目にレザは惚けたようにほあっと息を洩らした。

「おいしい・・・かも」

先程までの冷めた目付きは既に影を潜め、焦点の定まらない虚ろな瞳を二人に向けともなしに向けるレザ。

「おい、何か目覚めさせちまったみたいだぜ・・・」

ヘカはやれやれといった様子で両手を上げた。

「ぐ、ぐはははは！ついにレザも酒が分かる歳になったか！善哉善哉よきかなよき哉！かな」

ブルはいつもの調子で笑おうとしているようだが無理しているのは否めなかった。

「ねえ」

「は、はい？」

まるで別人のような色っぽい声質で声を掛けられたヘカは一步後ずさってしまった。

「もっと、ちようだい・・・？今度はさつきよりキツイやつを」

「いいっ!？」

カウンターの上に上体を預け、すぎるような目付きをヘカに注ぐ。

「だっ駄目だ！アンタにゃこれ以上飲ませらんねえ」

慌てて表に出してあったボトルを棚へとしまい込みながら、ヘカは

ブルへと目配せする。

（おいっ！お前のせいでレザが壊れちまっただろう！どうするつもりだ！）

（酒は飲んでも飲まれるな！心配無用！明日の朝には全部忘れている！がはは）

（そういう問題かよ！？・・・まあ全部忘れりゃ万事オッケーかな）

（そういうことだ！これにて一件落着！がはははは！）

「・・・てっ待て！この場はどうするんだよ！」

ヘカがそう声をあげた時であった。

「おいおい何だか騒がしいな。何かあったのかい？」

新たにバーへ入って来た人物がいた。

「リオ！」

皆の視線が一斉にリオの方へと向けられた。

頬を赤く染めたレザもぎこちなく首を向ける。

「な、どうしたんだ？僕はここに来ちゃ駄目なのかい？」

リオは両手を前で広げて大袈裟なジェスチャーをした。

「ああそういうワケじゃねえよ。ただお前がここに来るのは珍しいからな。ほら、座れよ」

ヘカは抱えていた酒瓶を下へそっと仕舞うと酔い潰れているレザをブルへ任せ、リオをカウンターへ座らせた。

「それで・・・何をしていたんだい？」

一息ついたリオは長椅子に寝かされ、寝息をたてているレザを見ながらヘカへ尋ねる。

「いやあ、まあ・・・ほんの些細なことだよ」

とてもじゃないがあんな馬鹿らしい事はリオには言えなかった。

第一、言ったところで聞いたりオ自身リアクションに困ることだろう。

結局リオにはいつものブルの暴走だ、としか伝えなかった。いつのまにか空になったグラスを傾けながらリオは言葉を切り出し

た。

「・・・ところで、こうやって四人集まるのは久しぶりだね」

「んー・・・そういやそうかもな。今日は偶々だし」

するとリオは少し改まった調子で話を続けた。

「・・・僕から、君らに伝えたい事があるんだ」

ふたつめ「もう決めたこと」

ふたつめ「もう決めたこと」

「ラウハを出す？」

ヘカはカウンターの両肘を預けた格好で思わず聞き返していた。

「そうさ。君らを誘いたいんだ」

リオは静かに、しかし決意に満ちた声で三人に語り掛けた。

まだ酔いの醒め切っていないレザはいつもとは違い、フォーカスの
かみ合わない眼差しでリオを見つめている。

「貴方、それが、どういう、意味、なのか、分かって、いるの？」

呂律が回っていない。

思考は本調子に戻っていないようだ。

「勿論、分かっているさ」

「そう」

レザの科白は素っ気無い。

ブルはというと、いつに無く堅苦しい顔で腕組みをしている。

「……………むにゃ」

「……………って寝てるのかよ！」

ヘカが突っ込みを入れる。

「あ？オレはリオの意見にサンセイだあ！」

欠伸をしながらもブルは答える。

どうやら最初から答えは決まっていたようだ。

「お前……少しは思考しろよ」

「おおっ！お前ら！こんな所でちまちま大人の言い成りに働いてる
だけなんてつまらんではないか！！」

大音声が酒場を包む。

「んなこと言っただって・・・なあ？」

ヘカはレザへ振る。

「・・・」

レザは頬杖をつきながらじっとリオを見ていた。

「もう決めたんだ。でも君らに無理強いするつもりは無い。僕一人でも行く」

その瞳は真っ直ぐに先を見ている。

「・・・分かったわ。止めても、無駄みたい、ね」

レザはふっとリオから目を逸らし立ち上がると（直後によるめいてヘカに肩を貸してもらったが）、両手を空に向けてやれやれといった感じで呟いた。

「・・・レザ」

「何よ」

リオの呼び止めに面倒くさそうに振り向く。

「・・・」

「・・・ついて、行って、あげるわよ。貴方一人に、なんか、行かせない」

リオはゆっくりと微笑んだ。

「ありがとう」

「おいおい、俺だけ仲間外れはゴメンだぜ！」

ヘカはリオの背中をぽんっと叩いた。

「ありがとう、みんな」

計画の決行は早い方が良いという事で明後日と決まった。

それまでの時間は個々の準備期間とそれぞれのラウハを抜け出す手段を考えておく時間とした。

リオは廃棄機械処理場へ最後の仕事がてら、食料の調達を行っていた。

密かに貯めておいた安い賃金を叩いてリオは食料を買い込んだ。

勿論大人達に悟られないように用心深く。

荷物は複数回に分けて自室に運び込み、入念に鍵を掛けて保管した。労働時間を終えたりオはこの『瓦礫の楽園』と云われたラウハを見納めようと町並みを歩いていた。

明日は安息日だ。

皆と遊ぶのも悪くは無いかもしれない。

いつものバーでヘカがシェイクしたカクテルを飲んで馬鹿騒ぎするんだ。

前祝。

大人達への反旗を翻す自分らの門出を祝う。

そんな事を考えながら歩いていた所、先ほどとは全く違った場所にリオは立っていた。

「やれやれ・・・」

正面ゲートとは対極の位置にある今はもう使われていない裏ゲートがリオの前に立ちはだかっていた。

周りの家々は看板こそかかっているものの、全て廃業、それ以前に人っ子一人いないゴーストタウン地帯だった。

町の外れとはこんなものかもしれない。

繁栄の裏には必ず闇がある、とは良く言ったものだ。

最も、現在のラウハの状態が『繁栄』に相当するかと言えば、甚だ疑問だが。

リオは背を向けて町の中心部へと足を向けたその時であった。

「・・・・・・あ」

声が聞こえた。

ほんの少し、ともすれば風の音にさえもかき消されてしまうかのような小さな声。

僅かだが、聞こえた。

リオは歩もうとした足を止め、周りの家々を注意深く観察した。

見た所人気は無い。

だが先ほどの声は確かに人の声だった。

恐らくは女性、いや女の子の。

聞いてしまったからにはリオにはここから立ち去る事は出来なくな
った。

「・・・誰かいるのか？」

取り敢えず呼びかけてみる。

「・・・・・・・・ああっ」

聞こえた。

今度ははっきりと聞こえた。

少女の声だ。

しかもかなり近い。

リオはおおよその声のした家に向かって歩き出した。

「何処だ？何処に居る？！」

リオは呼び掛けながら『GEWEHR』と書かれた看板がかけられ
た廃店舗に入っていた。

入った途端、もの凄い埃がリオの顔面を襲った。

リオがドアを開けた瞬間梓に溜まっていた埃が全て落ちてきたのだ
った。

「うっげほげほっ・・・けほっけほっ」

はたいて埃を四散させた彼の視界に飛び込んできたのは余りにも現
実離れた風景だった。

カウンターのみの簡素な店内は、まるでモノクロ写真のように全て
の物の色が奪われていた。

それもこれも全て埃の産物となっている。

かつては透き通って煌びやかな輝きを放っていたガラスケースも今
や擦りガラスと見紛う程となっている。

果たしてここに声の主はいるのか？

一歩足を進める毎に床の木板は嫌な音を立てる。

どうやら腐っているらしい。

慎重な足取りで店の中央まで来たとき、彼はようやくこの店が何の
店かを知ることが出来た。

銃砲店。

今自分の目の前にある白骨化した死体が全てを物語っていた。骨の手には散弾銃と思しき大型の重火器を握り、カウンターに身を預けるようにして足を投げ出している。

他にも死体の周りには様々な種類の銃達が転がっていた。

知識が無いので分からないが、大きなものから小さなものまで。

それらの銃は相当古ぼけていることから、かなり前に死んだものとみられた。

少なくとも十数年前なんて新しいものではない。

不思議と恐怖は無かった。

むしろ納得したとも言える。

何故この辺一帯がゴーストタウンになったのか。

何故誰も寄り付かないのか。

その理由を垣間見た気がした。

「そこにいるんだろ？出てこいよ」

リオは死体がへばり付いているカウンターの反対側に向かって呼び掛けた。

死体を発見した時既にそこにいる事は分かっていた。

「……ああああ」

リオは返事を待たずにカウンタを乗り越え、声の主と対面した。

言葉が出なかった。

カウンターと陳列棚の間という狭い空間の中にうずくまっていたのは、奇妙な服装をした少女だった。

ぺたりと座り込んだ体制のまま少女は呆然とした顔でリオを見上げている。

その瞳は漆黒。

そして髪の毛もまた、漆黒であった。

それと相對するかのような真っ白い肌。

色を失った世界にいるからか、両者のコントラストは更に強いようにも感じられた。

髪の長さは腰を優に越えており、少女の座っている周りの床にさえ広がっている。

ともすれば、自分の髪の毛に埋もれている、という表現も出来るかもしれない。

それほどまでに彼女の髪は黒いまでに黒く、そして美しかった。

これがリオと、そして後に『リン』と呼ばれる少女の出会いであった。

みつつめ「少しだけわかったこと」

みつつめ「少しだけわかったこと」

「……君は……誰だい？」

当たり前前の疑問をリオは彼女に投げ掛ける。

しかし返ってくるのは意味を成さない声だけ。

「……あ」

少女は口を「あ」とも「お」ともつかぬ形にして懸命に言葉を紡ごうとする。

「あっあ……っ！……！！……！！……」

ついには声さえも出すことが出来なくなったのか、少女は咽に両手を当てて咳き込む。

「……君、喋れないの？」

しかし少女は不安げな目付きでリオを見上げるだけで応えない。

「参ったな……」

リオは戸惑っていた。

無人のゴーストタウンにたった一人人がいたという事もそうだが、彼は彼女の独特の風貌に強く惹かれていたのだった。

見たことも無い服に見事なまでの、艶やかな黒髪。

自分の常識で言ってしまうと、病的なまでに白い肌。

それは自分らとは全く違った文化に生きる人間。

どうしようもなく興味が湧く。

いや、興味なんて言葉ではない。

思えばこの時、自分は彼女に恋をしたんだろう。

リオはすっと彼女の前に手を差し伸べた。

「ほら、？ まって」

少しの間、少女は不思議そうな顔でリオの掌を見ていたが、おずおずと自分の手をそれに重ねた。

彼女の初めての行動らしい行動を見てリオは安堵していた。

声も、言葉も通じない少女との初めて触れ合い。

意思の疎通なんて呼ぶには大袈裟なのかもしれないが、それでも彼の中には確かな感触が掌にはあった。

嚴重に鍵を掛けた先の食料庫の中に少女とリオはいた。

まさか大人達にばれないように食料を隠した倉庫が謎の少女のかくまう場所になろうとは。

リオは全く予期していなかった事だったが、幸い食料は腐るほどある。

少女を表に出せない以上、一時的にせよここにかくまっておくしかないだろう。

「お腹は空いてるかい？」

無駄とは分かっているつもりオは一応少女に声を掛ける。

少女はリオの発した言葉の意味を理解していないようだった。

しかし、お互いの事を少しでも知るためには、たとえば意味など伝わらなくても呼び掛けるのが良いのだ。

母親が言葉を知らない赤子に呼び掛けるように。

リオは適当に見繕ったパンを持っていくと、少女に差し出す。

「ほら、美味しいよ」

「・・・・・・」

リオは一切パンを千切り、自分の口に入れてもう一度彼女を促す。恐る恐るパンを受け取った少女はもそもそと落ち着き無く口をつけはじめた。

まるで小動物か何かに餌をやっているような気分だった。

・・・しかしこれからどうすれば良いのか。

明日、そして明後日の事を考えるとこのままずっと彼女をかくまっておくわけにもいくまい。

かといって彼女を見捨てる事などリオには出来なかった。

自分の中では結論は出ているのかもしれない。

しかしそれで良いのだろうか。

どちらにも決めかねて宙ぶらりんの状況に甘んじている方がよっぽど楽なんだな、とリオは改めて感じていた。

何かを決める事は難しい。

何故なら決めた後に何が起こるか分からないから。

予測がつかないから。

知っていれば怖くない。

分からないから怖い。

未知＝恐怖

この方程式をリオは壊したかった。

次の日の事である。

「さあ、こっちに来なよ」

リオは異国の少女の手を引いて自分の仕事部屋への扉を開いた。

その部屋には様々な機械のジャンクが棚に放置されており、ほのかな油の匂いがした。

製図を書くための机に彼女を座らせると、リオは散らかっている机上を手早く片付ける。

そして真新しい紙ロールから適当な長さの紙を破って机に置いた。

彼女は不思議そうにリオの行動を見ている。

「ほらっこれ」

そしてリオは彼女に鉛筆を渡す。

しかし彼女は鉛筆の握り方が分からないようだった。

「やれやれ、しょうがないな。こうだよ」

彼女の細い指をそっと組み替えてやる。

「・・・？」

しかし彼女は『これでどうしろと？』と目で訴えてくる。

彼女の持つ漆黒の大きな瞳がリオを見詰める。

そんな目で見られるとことんまで教え込みたくなる。

「・・・ようし」

リオはアルファベット全てを紙に書き出す。

そして一文字づつ指し示しながら色んな言葉を発音した。

ほんの少しでも良い。

なんとしても彼女に自分を理解してもらいたかった。

たとえそれが言葉一文字でも。

「・・・っ！っ！」

突然彼女はリオの手のひらをぴたぴたと叩き始めた。

「な、なんだい？これかい」

リオは手に持っていたペンを彼女に渡すと、彼女は少し考えるような仕草をしてからゆっくりとペンを紙の上にさまよわせた。

たどたどしい手つきの彼女のペン先にリオは神経を集中させる。

「L・・・I・・・N・・・？」

L・I・N。

彼女の指し示した文字列。

リオはすぐに理解した。

「L・I・N。・・・LIN。・・・リン？それが君の名前かい？」

少女は曖昧な笑顔を作って首を傾げた。

「・・・そうなんだね？」

彼女が微かに首を縦に振った。

「・・・リン。リンかぁ。やっと君の名前が分かったよ」

よっつめ「とても不幸なこと」

よっつめ「とても不幸なこと」

ずっと部屋で文字を教えるのも芸がないとリオは思い、リオはリンを連れて市場に来ていた。

大勢の人で賑わう市場は、いつも通り活気に満ちていた。

「何か買ってあげるよ」

リオは彼女の手を引いて露天を見て回る。

簡素な作りの幌テントに構えられた店には、色とりどりの宝石類が並べられていた。

そのひとつを手にとって見る彼女。

小さな青い宝石が中央にはめられたネックレスだった。

掌の上に乗せて転がすと封じ込められた光がきらきらと輝く。

「それがほしいのかい？」

リンは頷く。

「よしわかった。はい」

ポケットからコインを出すと店番に渡し、ネックレスを彼女の首に掛けてやる。

「・・・っ！」

幾分か興奮した顔で彼女はリオの手を握る。

彼女なりの『ありがとう』なのだろう。

「はははっ喜んでもらえて良かった」

互いに二人は笑いあう。

彼女が口を開いて何かを言おうとした時だった。

強烈な突風。

その後、腹に堪える爆音がした。
どん。

そうとしか言い表せないこもった破裂音。
リンは肩を竦ませて、耳を塞いでいる。

「何だ今の音は？」

その時、ラウハのメインストリートは炎に包まれていた。
夜の闇を吹き飛ばす程の光源となった火は、街全体を焦がすようだった。

火の熱に追い立てられるようにして逃げ惑う人々に混じってブルは道を走っていた。

「一体何なんだチクショー！」

顎に伝う汗を拭いながら石畳の道を疾駆するブル。

見覚えのある看板が見えた。

ヘカの働いている酒場だった。

ドアを開けようと取っ手に手を掛けると、信じられない程に熱い。

「グワツチツ！コンチクショーメ！！」

ブルは巨体を活かしてドアに体当たりを仕掛ける。

二回ぶつかった所であっさりとドアは白旗をあげた。

店内に踏み込んだブルが見たのは、打ち上げ会のために準備されていたテールブル達だった。

上には上等そうなワインに食器類が置かれている。

しかし今、その全てが炎に包まれていた。

「オオーーーーーイ！ヘカあ！いないならいって返事しろーー！！」

ありったけの大音声でブルは叫んだ。

その時だった。

カウンター奥にある従業員専用出口をぶちやぶってヘカが出てきた。
そのまま床にごろごろと転がる。

「どわちゃちゃっ!!」

よく見ると両肩に火がついていた。

転げまわって何とか火を鎮火したヘカは、肩で息をしながら立ち上がった。

「あぶねー・・・もうちょつとで黒焦げになるところだったぜマジで」

「オオオオー！ヘカ！生きてたかあ！良かった良かった！」

ブルは両手を広げてヘカに抱きつこうとするが、難なくかわされてしまう。

「バカヤロ！見てたんなら助けろ！それに俺は男に抱きつかれて喜ぶ趣味はねえっての」

服の埃を払いながらヘカは自分の肩を気にするように見る。

「あーあ。お気に入りジャケットがこんがり焦げてらあ・・・まあ命には代えられんか」

「スマンなあ！水をかけようにも周りには酒しなくてナあ！まあトニカク無事で良かった良かった！」

ばんばんと肩を叩いて豪快に笑う。

「あいあい。分かったからとつと皆と合流しようぜ。こんな所で犬死なんてまっぴら御免だ」

ブルとヘカは火のまわっていない裏路地を通ってリオの仕事場を目指していた。

「しっかし一体何なんだ？この騒ぎは」

「オレにきかれてもサッパリ分からん！宿舎にいたら急にドッカーンでいきなり火の海だ！」

「短絡的且つ分かりやすい説明をありがとう」

その時、銃声が聞こえた。

二人は曲がり角で止まる。

「今のは・・・もしかして銃声っぽくナイカ？」

「いや、もしかしくなくても銃声だな」

二人に緊張が走る。

かなり近い。

しかも銃声は連続で響き渡った。

そして悲鳴、助けを求める叫び声、断末魔の奇声。

「おいおい・・・洒落になんねえな」

音だけでも察しがついた。

曲がり角の向こうでおこっているであろう惨劇にヘカは顔を引き攣らせた。

「何かヤバイ匂いがぷんぷんするぜ」

後ろでブルが真剣な口調で言う。

ゆっくりと顔を曲がり角の壁に突き出すヘカ。

「ああ・・・これはモノホンだな」

何者かに銃殺された住人の死体が目に入る。

「ここにいちやまずい。早く皆と落ち合うぞ！」

「合点承知！」

二人は路地裏を抜けて一目散に駆けていった。

今夜の打ち上げのために食材を買いに市場に来ていたレザは、市街地の空が赤く光っているのを見て目を疑った。

「嘘・・・！ちよつとどういふことよこれ！」

レザは買い物袋を取り落として駆け出した。

しかし市場を出たあたりでレザは更に信じられない光景を目にした。見たことの無い服を着た兵士のような集団が見慣れない銃を手に住人を虐殺していた。

銃口から放たれる光。

血を噴き出して倒れる人々。

動かなくなった死体を足で転がして更に銃弾を撃ち込む。建物に逃げ込んだ人達には小さな球が投げ込まれた。

それが何なのかレザには分からなかったが、その後の出来事である程度が察しがついた。

どういふことだろうか？

「・・・・・・？」

「・・、・・・・・・」

・・・・・・」

「・・・・・・。・・・・・・」

会話がひと段落ついたので、兵士達はレザに向き直った。
そして無言で去っていった。

「・・・・・・？」

レザは目を白黒させるばかりだった。

てつきり殺されるのかと思っていたからだ。

狐につままれたような思いで、レザは重い腰を引きずりながら再び歩き出した。

いつつめ「今、走り出すという」と

いつつめ「今、走り出すということ」

先ほどの爆音で騒動となった市場は、市街地へ戻る人でごった返していた。

「とにかく街の中心部に向かおう」

リンを連れてリオは市場を出る。

市場を出て暫くしたところ、見覚えのある後姿が見えた。

しなやかにカールした金髪。

ラウハの中でもとびきり綺麗に輝いて見えるあの髪を持っている人物は、リオの知る限りでは一人しかいない。

「レザ？」

「・・・リオ！」

振り向いたレザの顔色が変わる。

「リオ・・・その娘誰？」

「ああ、この娘はリン。ちよつとワケありだね」

「・・・」

顎に手を当てる。

少し考えてレザはリオの目をじっと見た。

「あなた、今ラウハがどうなっているのか知ってるの？」

「どういふことだい？さっきの爆発と何か関係あるのか？」

「街は火の海。その上可笑しな奴らが街の人たちを・・・ころ、して」

言い淀む。

瞳をさ迷わせてレザはぐっと拳を握る。

「・・・何だって？そうしてそんな・・・！他の皆は！？」

リオの顔色が急速に色を失っていく。

「・・・わからない・・・わ」

項垂れてレザは呟く。

声は震えていた。

あの光景がまた目の裏に蘇る。

「逃げなきゃ！ここにいたら、皆殺されるわ！」

顔を上げてレザは叫んだ。

瞳は僅かに潤んでいた。

「・・・早く！」

手を握られた。

右手にはリンの手。

左手にはレザの手。

二人の少女の手の感触を感じながら、リオはめまぐるしく入ってきた情報を整理する事に必死だった。

「おいっ！あれ見ろよ！リオとレザだよ！」

ヘカは仕事場の高台を駆け下りながらブルに叫んだ。

「オオウッ！確かにそうだ！にしてももう一人の見知らぬ可愛い子ちゃんは誰だ？」

「さあなっ！アイツに恋人がいたなんて初耳だが！」

三人との距離が近くなる。

よく見るとリオは両手をレザと見知らぬ少女に握られていた。

「おいおい、あれがまさに両手に花って奴か？」

「ヌウ・・・リオがあそこまで色男だったとワ！ぬかったわ！」

「今はそんな事言ってる場合じゃねえ氣もするがな！」
ようやく合流する事ができた五人。

「ブルにヘカ！無事だったか？」

リオは高台から降り立った二人に話し掛けた。

「まあね。火事に巻き込まれて焦げそうになったけどな」

「そんでそのコは誰だ？」

ブルががちりした指をリンに向ける。

「それは後で話す！とにかく出発だ！」

「・・・えっ？出発って・・・リオ、もしかして」

「一日早くなつたが、計画に変わりは無い。みんな走れ！」

そして僕らは走り出す。

何もわからぬまま。

いや、何もわからないことが、よかったのかもしれない。

走ること、一生懸命になれたから。

そうして、僕らは狭い青春を、駆け抜けていく。

五人は街の西端にある貨物列車の駅に来ていた。

駅には数台の列車が止まったままであった。

あらかじめ目星をつけておいた蒸気機関車の前まで走る。

「よしみんな！ラウハを出るぞ！」

リオは列車を見上げ、皆を鼓舞するように大声で言った。

「レザは操縦と整備を頼む！ブルは切替機を動かせ！ヘカは滑車を切り離せ！」

リオは皆に役割を分担し、リンを連れて一両目の列車に乗り込んだ。

「どっせーいっつとぉ！進路カクホ完了だ！」

ブルの声が線路の奥から聞こえた。

「よし！ブルはボイラー室に行つて発車の準備を」

「ラジャーっす！」

ブルは腕を大袈裟に振りながらボイラー室に飛び乗る。

「よっ！ほっ！とっ！と」

ヘカは列車の天井を渡り歩きながら滑車の連結部を次々に外していく。

「おっしや！こっちは作業終わりだ」

リオはリンを連れて運転室に移る。

「ブル！ボイラーを焚け！がんがん石炭を入れろ」

「合点承知！」

レザは計器類を真剣に見据えながら呟く。

「まずいわね。思ったより蒸気圧が上がらないわ」

「それはどういふことだい？」

「さしあたって運行に問題は無いけど、加速するのに時間がかかったらうってことくらいかしら」

この分野に関して話す時は、レザの顔が年齢より大人っぽく見えるから不思議だ。

「そうか・・・ブル、石炭を入れるだけ入れろ」

「あいさ、やってるさ！」

ボイラーに次々と石炭が放り込まれていく。

やがて煙突からは白い蒸気が吹き出し始める。

「おいおいおい！オレを忘れないよお！」

ヘカが動き始めた先頭車両の足場に足を引っ掛けたまま叫んだ。

「ひゃっほー！」

けたたましい汽笛をあげながら、リオ達の乗る蒸気機関車は力強く走り始めた。

「さて、これからどうするんだ？」

走行も軌道に乗った機関車の車内で、ヘカは客席の机に腰を降ろして訊いた。

リオは車窓から流れ行く荒野を見ていた。

「とりあえず隣町のヒメルまで行こう。今後の事はそこでゆっくり話す」

「・・・ヒメル。ラウハとは違って伝統工業が主な収入の遅れた

街。それに未だ古い風習が残されていると聞いたわ」

レザは反対側の席で興味無さ気に頬杖をついて二人を眺めていたが、とりあえず一通り自分の知識を披露する。

「カルチャーショック受けたりしてな、オレら」

ヘカは両手を上げて肩を竦めた。

「そういえばリンは何処に行ったんだい？」

『リン』。

その名前にレザはぴくりと反応を示す。

「そろそろ話してくれても良いんじゃないの？あの娘が何者なのか」
リオに向き直る彼女。

金縁眼鏡の向こうにある蒼い瞳がじっと注がれる。

「オレも聞きてえ〜な〜」

ヘカは腕枕をして踏ん返りながら続ける。

「にしても、自分から厄介事に突っ込む性格、変わらないよな」
にかつと微笑む。

後ろの席で爆睡していたブルを叩き起こした後、リオは事の経緯を皆に語った。

「なるほど。町外れに一人でいた、ねえ」

顎に手をあてて視線を泳がせるヘカ。

「要するにリオはあの娘の事ほっとけなかったんだ？」
むすつと不機嫌な顔のレザ。

「良いんでないの？オマエもコイツの性格知ってるだろ」

ヘカはからからと笑いながらレザの肩を叩く。

「・・・あんな場所で一人で、喋れなくて、・・・僕は見捨てる事なんて、出来なかった」

ぼんやりと握り締めた手を見詰めるリオに、レザは聞こえないように呟いた。

「どうしようもないってこと、知ってるくせに」

むつつめ「僕らのやるべきこと」

むつつめ「僕らのやるべきこと」

「おい、オマエも何か喋れよ！」

ヘカは寝惚け眼のブルの脇腹を小突く。

「んあ・・・マア、リオは立派ダァ！ひとけの無い町外れにとりのこされていた喋れないオンナノコを助けるなんざそうそうできることじゃあねええ！」

「げ・・・コイツちゃんと聞いてやがったんか・・・絶対寝てると思っただのに」

「笑えないからやめて」

レザは視線を向けずに一蹴する。

「今のはギャグじゃないぞお、レザ」

「そもそも貴方の存在自体がギャグなのよ」

「おーおー言ってくれるう！俺にとってそれはサイコーの褒めコトバ！」

「そこで喜ぶなよ、ブル！」

そんな三人の会話を背に、リオは一人列車の後部へ向かった。

規則正しく並んだ客席を抜け、連結部がむき出しのデッキへ出る。

足元には蟹の鋏のような連結器が開いたままになっていた。

正面を見れば景色が手前から前へ、流れている。

その人一人がやっと立てる僅かなスペースに、彼女はいた。

落下防止用のフェンスに身を預け、流れ去る景色に目を向けている。

「ちよっと目を離れた隙にいなくなって。心配したよ」

まあ列車はあれから一度も停車していないので、降りて何処かに行っただとは思っていなかったが。

リンは視線をこちらに向けるが、相変わらず言葉は無い。
彼女を見詰める。

列車は結構な速度で走行しているので、吹き荒ぶ風はかなり強い。
例に違わず吹き抜ける風は、彼女のぬれば色の髪をしなやかにうね
らせ、弄んで去っていく。

リンの漆黒の瞳が揺れた。

彼女の瞳は『どうしたの?』、そう言っていた。

リオはそれをそのまま言葉として受け、喋りだす。

「これからの事をね、考えていたんだ」

彼女の隣に立つ。

窮屈だが、苦痛は無い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女が身体を密着させてくる。

まるで怯えたような表情。

桃色の唇が震えていた。

「大丈夫さ。君のことは僕が必ず守ってみせる。最後まで、ちゃん
と」

そのために一緒に来たんだ、と心の中で付け足す。

しかし彼女の不安な顔は消えない。

やがて彼女は指を上げた。

過ぎ去ってゆく線路上の景色に向かって指を指した。

「・・・・・・・・? なんだい?」

リオは彼女の指の方向を目で追う。

「?」

何かが、見えた。

自分の乗っている列車が走り去った線路を追いかけるように、もう
一つの列車が、走ってくるのが見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そのシルエットは少しずつ大きくなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まさか」

近付かれているという事は、速度はこちらよりも出ているということだ。

・・・このままでは衝突する。

「リン、車内へ入れ！」

そう彼女に促す。

しかしリンは足が竦んだのか、フェンスを手に握ったままへたり込んでいた。

「リン！」

リオは彼女を腕を掴むと、引きずるようにして車内に入れた。

リオは大声で衝突の危険を報せようとしたが、如何せん距離があり過ぎる。

かといって声の届く距離になってしまったら手遅れだ。

何か、何か使える物は無いか。

リオはデッキを見回す。

発炎筒が目に入った。

すぐに蓋を抜くと擦って火を着ける。

それを列車に向かって大きく振った。

「速度を落とせ！！！！衝突するぞ！！！！」

しかし返ってきたのは信じられない返事だった。

突然耳をつんざく銃声。

そしてデッキの壁にはみるみる銃痕が出来た。

「わあっ！」

慌てて身を伏せる。

嫌な音をたてて跳弾が跳ねる。

車体に穴を空けて火花が散った。

「何なんだよ一体！」

リオは中腰のままデッキを出た。

そのまま客席を突っ切って運転室に直行する。

運転室にはレザがいた。

「さっき変な音が聞こえたけど、何？」

質問に答えている暇は無かった。

「今すぐ列車の速度を上げろっ!! 追われてる!! このままじゃ衝突する!!」

「わ、わかった!」

レザはすぐさま運転席に着く。

「……駄目だわ。蒸気が足りない! ブルを呼んできて!」

「そんな暇は無い! 僕がやる!」

リオはスコップを引っ掴みながらボイラー室に向かった。

「おいっ! 何が起こってる!? 銃撃されてるぞ!」

ヘカが血相を変えて先頭車両に来了。

「うるさいわねっ! 今集中してるの! 話しかけないで!」

レザは振り返らずに怒鳴った。

「アイツラだ……アイツラが追って来たんだ! ヤバイ匂いがしてきたぞ」

いつの間にか背後にいたブルが真剣な口調で言った。

「それって……ラウハを襲った奴らって事?」

「ソウだ! マチガイ無い!」

「畜生め! こんな所で死んでたまるかあ!」

ヘカは闘志を露にして走り去っていった。

「ちよつとヘカ! 後ろは危険よ! 全く、しょうがないわね。ブル、貴方はボイラー室に行つてリオを手伝つてあげて頂戴」

「ら、ラジャー! しっかしヘカはどうしたもんか……」

「ほつといて大丈夫よ。殺しても死なない人だから。あの人は」
事も無げにしれつと言うレザ。

「やっぱお前の事ワカランわ。俺」

後部車両に向かったヘカは、最後尾の席で膝に顔を埋めて震えているリンの姿を発見した。

「……怖かったんだな。もう大丈夫だぜ。オレに任しときな!」

彼女の頬を一撫でするとヘカはデッキに躍り出た。

「やいやいやい！オレ達の旅路を邪魔する奴は誰であろうと許さねえぞ！」

天に拳を突き出して追いかけてくる列車に向かって叫ぶヘカ。
するとびゅん、と銃弾が頬をかすめる。

「おわあっ！喋ってる時に撃つの反則！」

慌てて身を屈めて言う。

そして絶え間無い銃撃の嵐。

「ぐしょお・・・奴さん達かなりマジみたいだな」
すつと懷に手を入れる。

「じゃじゃじゃーん！！そらよっと！」

手に握られていたのはワインの瓶で作ったお手製の火炎瓶だった。
放物線を描いて投げられたそれは、猛追してきていた列車の目の前の線路に落ちた。

強烈な爆発音が耳に響いた。

爆風でデッキの壁に叩きつけられるヘカ。

「どひゃー！すげえ威力だ！さすがマグナム」

煙が晴れると、破壊されてぐちゃぐちゃになった線路の上を走ったのだろう、脱線して斜めに走行している列車が見えた。

「残念無念、また来週！」

ヘカは一発敬礼をして横転する列車を見送った。

登場人物紹介

登場人物

主人公

名前…リベリオⅡグランズイル (L i e b e r i o Ⅱ G r a n z e a i l)

ニックネーム…リオ

性別…男

年齢…15歳

職業…児童労働者 (廃棄機械処理担当)

外見特徴…ダークブラウンの髪に同色の瞳。髪は手入れしていないが、癖毛ではないのでまとまっている。

服装はこげ茶色のズボンに白いシャツ (少年児童労働者は皆この服装である)。

物心ついた時から手に職をつけて大人達と同じように働いてきたり才は非常に冷めた性格である。

強い勢力に立ち向かうことはせずに、無難な回答でやり過ごす。

聞き分けの無い連中に対しては口八丁に言いくるめ、軽くいなすしなやかさも持っている。

しかし今までも、そしてこれからもずっとこの街で労働を続けていることに對して彼は少なからず疑問を持っている。

サブキャラ

名前…レザミアⅡカスパール (R e z a r m i a Ⅱ C a s p e a r 1)

ニックネーム…レザ

性別…女

年齢…15歳

職業…児童労働者 (機械整備担当)

外見特徴…透き通るような金髪と紺碧の瞳が特徴。

普段は太い金縁眼鏡と大きめのローブに似たドレスに身を包んでいる。

お洒落には気を使っていないが髪は幾分かロールしており、小さな部分で彼女は自分らしさを表現しようとしているようだ。

機械に関して博識な彼女は、一行の参謀的存在でもある。

しかし常に計算で物事を割り切ろうとする性質があり、それが狂うと自棄を起こすこともある。

サブキャラ

名前…ブルネクⅡオランスキー (BrunekⅡOranskey)

ニックネーム…ブル

性別…男

年齢…15歳

職業…児童労働者 (鉱石発掘担当)

外見特徴…元々は薄茶色だった髪は鉱石のすすで今は黒く変色してしまっている。

髪と同じように浅黒い肌とがっちりした体形は年齢以上に逞しく見える。

考えることが嫌いで、行動が先に出る。

性格は直情径行でいたって単純。

そのため正反対の性格であるレザとはそりが合わない。

サブキャラ

名前…ヘカリオスⅡプルテイツ (HekariosⅡPrteritiz)

ニックネーム…ヘカ

性別…男

年齢…15歳

職業…バーテンダー見習い

外見特徴…涼やかな銀髪と銀の瞳が印象的。

大きなロングコートをそつなく着こなしており、身なりの良さが窺える。

一行の中で唯一児童労働者ではない彼は、この街の数少ない富裕層の人間である。

しかしそんな事は彼は全く気にせず、身分に関係なく誰とでも打ち解けることが出来る。

性格は陽気で、彼のおどけた言動と仕草は場の雰囲気を変えさせる。

ヒロイン

名前…リン（本名かどうかは不明）

ニックネーム…なし

性別…女

年齢…13～15歳（推定）

職業…不明

外見的特長…長い黒髪と抜けるように白い肌を持つ異国の少女。

一枚の大きな布を幾重にも折り縫い、腰にリボンで結って着る「キモノ」という服を着ている。

言葉を喋る事が出来ず、仕草や目付きだけで自分の気持ちをひたむきに表現しようとする様はリオの心を揺さぶる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4686e/>

太陽は眠っている

2010年10月28日04時15分発行